The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中高年者のボランティア活動ニーズと属性的規定要因：団塊の世代は違うのか?
Author(s)	中原，純
Citation	生老病死の行動科学. 2007, 12, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

中高年者のボランティア活動ニーズと属性的規定因
－団塊の世代は違うのか？－

The demographical factors for the volunteer activity needs of the person at old and middle age : Are Japanese baby boomers special?

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程 日本学術振興会） 中 原 純

Abstract

This study aims to 1）expose the data about the volunteering needs, 2）identify that this data extracts the two axes（aggressiveness/negativity to volunteer activity, community-contributing/knowledge-giving） by Kobayashi & Fukaya（2005）, and 3）explore the relation between the two axes and their demographical attributes. A mailing survey was conducted for randomly selected people between 50 and 74 years of age（n=1,598）living in Suita city, Osaka. The results indicated that needs of the community-contributing activity was high, the two axes which was shown by Kobayashi & Fukaya（2005） were validated, and Japanese baby boomer was not special for the both axes and the person of a high academic career have high needs of the volunteer activity of the knowledge-giving type.

Key word : volunteer activity, persons at old and middle age, Japanese baby boomers

Ⅰ 背 景

積極的にボランティア活動に参加する中高年者において、活動は ADL の維持・改善（e.g., Lum & Lightfoot, 2005 ; Menec, 2003）、身体的な機能低下・障害の予防（e.g., Glass, Seeman, Herzog, Kahn, & Bercman, 1995 ; Moen, Dempster-McClain, & Williams, 1992）などのポジティブな身体的効果や主観的幸福感の向上（e.g., Menec, 2003 ; Thoits & Hewitt, 2001）、抑うつの軽減（e.g., Morrow-Howell, Hinterlong, Rozario, & Tang, 2003 ; Musick & Wilsom, 2003）などのポジティブな心理的効果を持つことは多数の研究で示唆されている（中原，2005）。このことから、ボランティア活動へのニーズに沿った活動支援を行うことは、中高年者の身体面および心理面に良好な効果をもたらすと考えられる。そして、中高年者のボランティア活動の具体的活動ニーズについては、これまで実態調査のような形で多数行われてきている。大阪府地域福祉推進財団老人総合センター（2001）の調査において、高齢者ボランティアの養成を目的とした「シルバーアドバイザー養成講座」を受講した60～80歳の高齢者を対象にボランティア活動経験について質問したところ、社会福祉活動が最も多く、次いで自然・環境保護、体育・スポーツ・文化活動、青少年健全育成の順で多いことが報告されている。また、NALC シニア研究所（2004）の調査においては、60～79歳の高齢者を対象に関心のある社会活動分野について質問したところ、高齢者福祉が最も多く、次いで地域の安全・防犯、環境保護・保全、生涯学習の支援、まちづくりの順で多いことが報告されている。2つの調査では、ボランティア活動経験について質問した場合と社会活動への関心として質問した場合とで質問自体は異なっているが、いずれも社会福祉活動が最も多く、次いで環境保護に関する活動、スポーツや学習

の支援に関する活動などは経験者も多く、関心も高いことが示されている。

一方で、これらの報告は実態調査にとどまり、ボランティア活動の関心の内容について、性別、年齢、最終学歴などの個人属性との関連を実証的に示したものは少ない。この現状をふまえて、小林・深谷（2005）は、具体的なボランティア活動ニーズについて分析した結果、「ボランティア活動への積極性－消極性」という積極性に関する軸と、「知識提供型－地域貢献型」というボランティア活動の内容に関する軸で捉えられることを提案した。そして、個人属性とボランティア活動への積極性および関心のあるボランティア活動内容との関係を検討し、年齢が高くなるほどボランティア活動への積極性は低下すること、学歴が高いほど知識提供型のボランティア活動へのニーズが高くなることなどを示している。また、性別の影響は積極性、内容ともに小さいことが示されている。しかし、ボランティア活動がこの２軸で説明できることや、属性とボランティア活動への積極性や関心のある活動内容との関係、とりわけ後者との関係に関する研究はほとんどなく、類似内容の追試的研究の蓄積が必要である。内閣府（2004）において、高齢者の中でも、若い高齢者の方が社会貢献意識は高いことは示されているが、その傾向は中年者にも当てはまるかどうかは検討されていない。

また、我が国においては、人口構成上非常に多い団塊の世代を含む向老期世代が、まもなく高齢者となる。団塊の世代は、実証的なものではないが、会社人間、低い公益志向、人並みより上の生活を望む（天野，2001）、高い就労意欲、地域との関係が希薄（中村・安田，2004）といったように、他の世代とは異なる様々な世代の特徴が述べられてきている。こういった世代の特徴がボランティア活動のニーズに反映される可能性があるため、年齢を連続変量として捉えるのではなく、世代として捉え分析する必要があると考えられる。

そこで本研究では、①大阪府地域福祉推進財団老人総合センター（2001）で調査された35項目のボランティア活動内容についてニーズのデータを公開すること、②それらの項目が小林・深谷（2005）と同様のボランティア活動積極性の軸とボランティア活動内容（地域貢献型―知識提供型）の軸が抽出されることを確認すること、③得られた軸に関するサンプルスコアと属性の関係、特に世代との関係を調べることで、属性とニーズの関係を探索的に検討すること、の3点を目的とした。

Ⅱ　方　法

１．対象者

大阪府吹田市在住の50～74歳の男女で、住民基本台帳より無作為に抽出された4,004名に対して、郵送法による質問紙調査を行った。その際、調査依頼書を同封し、その中で調査の趣旨やプライバシーの保護等に関する説明を行い、質問紙への返信をもって調査に同意したものとする旨を説明した。その結果、1,646名（回収率41.11%）から返信され、質問項目への回答に不備があったものを除いた、1,598名（男性718名、女性880名、平均年齢62.17±6.77歳）を分析対象とした。なお、本研究では、団塊の世代に特徴があるかどうかを検討することを目的の一つとするため、堺屋（1976）の定義に従い、調査を行った2005年１月～２月の時点で57～59歳（昭和22年～昭和24年生まれ）の対象者を団塊の世代とし、60～64歳の対象者を前団塊の世代、50～56歳を後団塊の世代、65～74歳の前期高齢者を高齢者と操作的に定義する。各世代の対象者数は、後団塊の世代が421名（26.3％）、団塊の世代が188名（11.8％）、前団塊の世代が344名（21.5％）、高齢者が645名（40.4％）であった。

２．調査内容

基本属性

性別、年齢、職業、主観的経済状況、主観的健康状態、最終学歴、配偶者の有無について質問した。職業は、「１．自営業」、「２．会社・企業勤務」、「３．パート・アルバイト」、「４．主婦・主夫」、「５．無職・フリーター」および「６．その他」、主観的経済状況は「１．全くゆとりがない」～「５．非常にゆとりがある」の5件法で尋ねた。さらに、主観的健康状態は「１．健康で特に問題はない」、「２．病気はあるが日常生活に支障はない」および「３．病弱で日常生活に支障がある」の3件法、最終学歴は「１．小学校・中学校卒業」～「４．大学院以上」および「５．その他」で尋ねた。最後に、配偶者の有無は「１．配偶者あり」、「２．死別」、「３．離別」、「４．結婚経験なし」および「５．その他」で尋ねた。

具体的なボランティア活動ニーズに関する35項目

具体的なボランティア活動内容を、大阪府地域福祉推進財団老人総合センター（2001）の調査項目に従って35項目設定した。各項目に対し、「１．全く興味がない」、「２．少し興味がある」、「３．とても興味がある」の３件法で尋ねた。

３．分析のための数値変換

職業は、１および２を「フルタイム」、３を「短時間労働」と変換し、４と５はそのまま用いた。また、６は欠損値として分析に用いた。最終学歴は、中原・藤田（2007）の区分に従い、「５．その他」を欠損値とした後、「１．小学校・中学校卒業」を「１．学歴低」、「２．高校・高等女学校卒業」を「２．学歴中」、「３．大学・短大卒業」および「４．大学院以上」を「３．学歴高」として、連続変量として扱った。配偶者は、１を「有配偶者」、２～４を無配偶者、５を欠損値として分析に用いた。

Ⅲ　結　果

１．ボランティア活動へのニーズ

どのようなボランティア活動に対して興味が高いかを検討するために、各項目の平均値を算出し、世代別に値の高い順に順位をつけた結果（Table 1)、各世代の上位10項目中、「リサイクル活動」、「世代間交流」、「災害援助活動」、「子どもの登下校時の安全確認」、「チャリティーバザー」、「町内の清掃」、「高齢者の介助」、「自主防災活動」の８項目が同一項目であった。このような、身近な地域で行うような活動は、世代を問わず興味を持たれている活動であることが示された。これらに次いで、「障害者の介助」などのサポートに関する活動、「博物館の展示説明」などの身近ではあるが専門職の強い活動、「幼児の保育」などの子どもに関わる活動が興味を持たれていた。一方で、興味の低い活動としては、「施設メンテナンス」、「施設管理（ボイラー管理）」、「駐車場管理」などの単純な肉体労働的な活動、「通訳」、「翻訳」、「英語の指導」、「書道の指導」などの極めて専門知識の必要な活動などであり、こちらも特に世代による違いはみられなかった。

２．ボランティア活動内容の多重対応分析

35項目のボランティア活動内容について多重対応分析を行い、得られた軸を解釈した。軸の数はボランティア活動内容についての先行研究（小林・深谷，2005）と同様に２軸とした。な

Table 1　世代別ボランティア活動ニーズの平均値（上位10項目）

後団塊の世代（50～56歳）	平均値（S.D.）	団塊の世代（57～59歳）	平均値（S.D.）
リサイクル活動	1.98 (.68)	子どもの登下校時の安全監視	1.91 (.64)
世代間交流	1.96 (.66)	リサイクル活動	1.90 (.70)
災害援助活動	1.90 (.61)	町内の清掃	1.88 (.60)
子どもの登下校時の安全監視	1.89 (.65)	世代間交流	1.85 (.64)
チャリティーバザー	1.88 (.66)	災害援助活動	1.80 (.65)
町内の清掃	1.87 (.61)	自主防災活動	1.79 (.61)
高齢者の介助	1.84 (.65)	チャリティーバザー	1.76 (.63)
障害者の介助	1.78 (.63)	健康のための体操の指導	1.73 (.68)
自主防災活動	1.76 (.66)	高齢者の介助	1.72 (.59)
悩みの相談相手	1.71 (.70)	悩みの相談相手	1.68 (.68)

前団塊の世代（60～64歳）	平均値（S.D.）	高齢者（65～74歳）	平均値（S.D.）
町内の清掃	1.99 (.61)	町内の清掃	2.03 (.63)
世代間交流	1.91 (.64)	子どもの登下校時の安全監視	1.99 (.69)
リサイクル活動	1.90 (.68)	世代間交流	1.94 (.61)
子どもの登下校時の安全監視	1.88 (.65)	リサイクル活動	1.90 (.69)
高齢者の介助	1.77 (.59)	自主防災活動	1.81 (.66)
災害援助活動	1.77 (.59)	高齢者の介助	1.75 (.65)
チャリティーバザー	1.76 (.65)	災害援助活動	1.72 (.64)
自主防災活動	1.73 (.67)	チャリティーバザー	1.70 (.65)
障害者の介助	1.66 (.59)	障害者の介助	1.69 (.62)
悩みの相談相手	1.65 (.69)	牛乳パックの回収	1.65 (.69)

お、固有値は第１軸で8.81、第２軸で2.98であった。多重対応分析の結果（Table 2)、第１軸は、プラス方向にボランティア活動へのニーズあり（Y）が、マイナス方向にボランティア活動へのニーズなし（N）が位置しており、ボランティア活動積極性（＋）―消極性（－）の軸と考えられる。第２軸は、プラス方向に「翻訳」、「英語の指導」、「通訳」、「海外での技術援助」といった英語の知識を生かした活動や、「学校での部活動の指導」、「書道の指導」、「スポーツの指導」、「ボーイ・ガールスカウト活動」といった技術や知識を提供する活動が多いこと、マイナス方向に「牛乳パックの回収」、「町内の清掃」、「公民館における託児」、「学校などでの給食のお世話」、「幼児の保育」、「募金活動」、「子どもの登下校時の安全監視」といったように住んでいる地域への寄与するような活動が多いことから、小林・深谷（2005）と同様の知識提供型（＋）―地域貢献型（－）の軸と解釈可能であると判断した。Figure 1に、成分負荷量を基にして各ボランティア活動内容を座標軸上にプロットした。

３．ボランティア活動内容の規定因の検討

多重対応分析により算出された第１軸および第２軸のサンプルスコアを従属変数、属性に関する各項目を独立変数として、男女別に重回帰分析を行った。分析の際、職業、配偶者、世代に関しては、ダミー変数として分析に投入した。第１軸（ボランティア活動積極性（＋）―消極性（－））を従属変数とした分析の結果、男性で R^2=.03（p>.05)、女性で R^2=.02（p>.05）となり、これらの属性変数では、ボランティア活動の積極性は説明されなかった。一方、第２軸（知識提供型（＋）―地域貢献型（－））を従属変数とした分析の結果（Table 3)、R^2 値

Table 2　ボランティア活動ニーズに関する多重対応分析の成分負荷量（n=1455）

	ボランティア活動内容	成分負荷量 第1軸	成分負荷量 第2軸
1	町内の清掃(N)	-.79	.79
	町内の清掃(Y)	.25	-.34
2	募金活動(N)	-.39	.20
	募金活動(Y)	.54	-.28
3	スポーツの指導(N)	-.38	-.18
	スポーツの指導(Y)	.51	.28
4	高齢者の介助(N)	-.77	.41
	高齢者の介助(Y)	.41	-.23
5	世代間交流(N)	-.95	.24
	世代間交流(Y)	.33	-.09
6	子どもの登下校時の安全監視(N)	-.92	.56
	子どもの登下校時の安全監視(Y)	.35	-.23
7	公民館における託児(N)	-.49	.23
	公民館における託児(Y)	.71	-.33
8	料理の指導(N)	-.41	.07
	料理の指導(Y)	.60	-.10
9	通訳(N)	-.24	-.28
	通訳(Y)	.89	1.29
10	自主防災活動(N)	-.76	.20
	自主防災活動(Y)	.43	-.12
11	リサイクル活動(N)	-1.00	.42
	リサイクル活動(Y)	.38	-.16
12	チャリティーバザー(N)	-.77	.39
	チャリティーバザー(Y)	.43	-.22
13	レクリエーションの指導(N)	-.60	-.09
	レクリエーションの指導(Y)	.64	.11
14	障害者の介助(N)	-.72	.34
	障害者の介助(Y)	.45	-.21
15	ボーイ・ガールスカウト活動(N)	-.33	-.08
	ボーイ・ガールスカウト活動(Y)	.87	.25
16	博物館の展示説明(N)	-.44	-.23
	博物館の展示説明(Y)	.56	.31
17	英語の指導(N)	-.22	-.31
	英語の指導(Y)	.87	1.40
18	難民援助(N)	-.58	-.06
	難民援助(Y)	.69	.08
19	災害援助活動(N)	-.94	.16
	災害援助活動(Y)	.44	-.07
20	牛乳パックの回収(N)	-.48	.38
	牛乳パックの回収(Y)	.50	-.41
21	祭りのお世話(N)	-.52	.16
	祭りのお世話(Y)	.61	-.19
22	学校などでの給食のお世話(N)	-.45	.20
	学校などでの給食のお世話(Y)	.74	-.33
23	海外での技術援助(N)	-.29	-.32
	海外での技術援助(Y)	.78	.96
24	学校での部活動の指導(N)	-.43	-.21
	学校での部活動の指導(Y)	.82	.43
25	幼児の保育(N)	-.45	.19
	幼児の保育(Y)	.71	-.31
26	子ども会活動(N)	-.61	.11
	子ども会活動(Y)	.76	-.14
27	書道の指導(N)	-.26	-.07
	書道の指導(Y)	.87	.27
28	留学生援助(N)	-.41	-.34
	留学生援助(Y)	.68	.63
29	健康のための体操の指導(N)	-.64	-.11
	健康のための体操の指導(Y)	.61	.12
30	施設管理（ボイラー管理）(N)	-.16	-.09
	施設管理（ボイラー管理）(Y)	.96	.67
31	翻訳(N)	-.16	-.24
	翻訳(Y)	.97	1.67
32	窓口受け付け(N)	-.43	.07
	窓口受け付け(Y)	.48	-.07
33	悩みの相談相手(N)	-.56	-.08
	悩みの相談相手(Y)	.51	.11
34	駐車場管理(N)	-.28	-.01
	駐車場管理(Y)	.73	.05
35	施設メンテナンス(N)	-.30	-.10
	施設メンテナンス(Y)	.76	.28

注　Table 中の(N)とはボランティア活動内容のニーズなしと回答、(Y)とはニーズありと回答した場合

は男女ともに 1 %水準で有意であり、男性では最終学歴（β =.34, p<.01)、前団塊の世代（β = -.10, p<.05）および高齢者（β =-.13, p<.05)、女性では、主婦・主夫（β =-.11, p<.05)、主観的経済状況（β =.09, p<.01)、主観的健康状態（β =-.10, p<.01)、最終学歴（β =.16, p<.01）および高齢者（β =-.10, p<.05）が第 2 軸のサンプルスコアと関連していた。

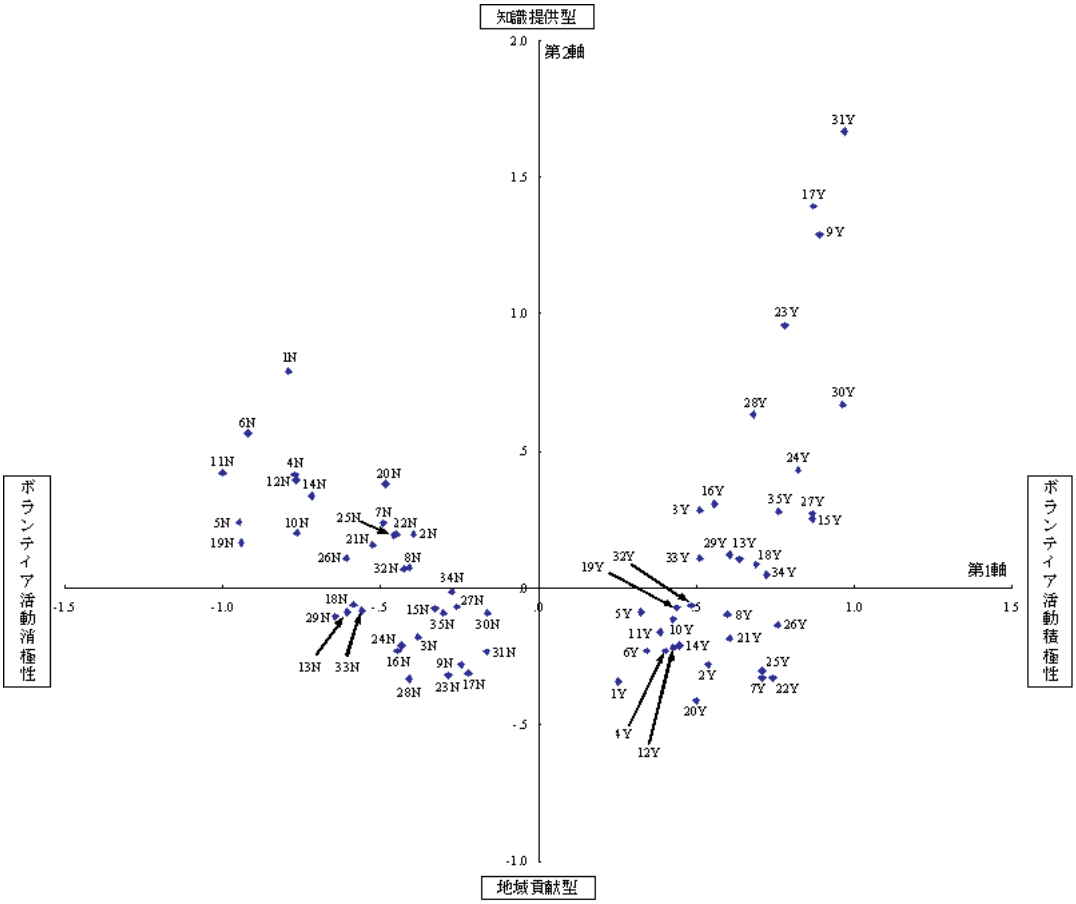

Figure 1.　多重対応分析によるボランティア活動のプロット（n=1455）

Ⅳ　考　察

1．ボランティア活動内容の具体的なニーズ

大阪府地域福祉推進財団老人総合センター（2001）に基づいたボランティア活動内容について、興味の程度の平均値を算出した結果、最もニーズが高いのは「町内の清掃」などの地域内で活動可能な身近な活動であった。しかし、世代間のボランティア活動内容に関するニーズの違いは、ニーズが高いボランティア活動内容もニーズの低いボランティア活動内容もほぼ一致していることから、それほど大きな差は無いのではないかと推測される。

2．属性とボランティア活動内容の具体的なニーズとの関連

ボランティア活動へのニーズを測定する35項目について多重対応分析の結果、ボランティア活動の積極性に関する軸とボランティア活動内容（地域貢献型―知識提供型）の軸が抽出された。小林・深谷（2005）では東京都練馬区の中高年（60～74歳）を対象者としており、本研究では大阪府吹田市の中高年者（50～74歳）を調査対象とした結果、同一の軸が抽出されたことから都市部の中高年におけるボランティア活動へのニーズは、以上のような２軸で解釈するこ

Table 3　ボランティア活動の第2軸を従属変数とする重回帰分析結果

独立変数	標準化偏回帰係数 従属変数 第2軸 地域貢献型（－）←→知識提供型（＋）	
	男性（n=662）	女性（n=793）
職業（vs フルタイム）		
短時間労働	.00	-.05
主婦・主夫	.04	-.11 *
無職・その他	-.05	-.02
主観的経済状況	.07	.09 **
主観的健康状態	-.01	-.10 **
最終学歴	.34 **	.16 **
配偶者（vs 有配偶者）		
無配偶者	.06	.06
世代（vs 後団塊の世代）		
団塊の世代	-.04	-.02
前団塊の世代	-.10 *	-.04
高齢者	-.13 *	-.10 *
R^2	.17 **	.10 **

*p <.05, **p <.01

との妥当性が示されたと考えられる。

第１軸のサンプルスコアを従属変数とした重回帰分析の結果、男女ともに重回帰式が有意ではなかったため、属性ではボランティア活動の積極性は予測できない可能性が示唆された。先行研究において、高学歴であること（Bowen, Andersen, & Urban, 2000; Okun, 1994; Wilson & Musick, 1997）、高収入を持つこと（Peters-Davis, Burant, & Braunschweig, 2001; Wilson & Musick, 1997）、健康状態が良好であること（Bowen et al., 2000）などがボランティア活動を促進する要因としてあげられており、また、小林・深谷（2005）においても主観的健康状態や職業は、ボランティア活動の積極性と関連していることから、本研究はこれらの先行研究に反する結果であった。最も大きな理由としては、小林・深谷（2005）は現在ボランティア活動を行っている人も含めてボランティア活動のニーズのある人というニーズの捉え方をしているのに対して、本研究では、ボランティア活動を現在行っているかどうかではなく、あくまでも今後行いたいかどうかという点でニーズを捉えている点である。これらから、実際の活動に対しては、属性要因が影響を及ぼす可能性は高いが、ボランティア活動を行いたいという気持ちに対してはあまり影響しない可能性が示唆される。その他、関西人と関東人の気質の差、対象者に含まれる年齢の差などが考えられる。しかし、これらの先行研究との不一致に関して、本研究では明確な結論を出すことは出来ないため、今後の検討課題であろう。

次に、第２軸のサンプルスコアを従属変数とした重回帰分析の結果、男女ともに高学歴の人ほど、知識提供型のボランティア活動ニーズが高いことが示された。この点は小林・深谷（2005）と同様に、高学歴者ほど人に教えるボランティア活動へのニーズを持っていることが追試され、我が国において、最終学歴はボランティア活動への積極性というよりも、ボランティア活動の種類に影響すると考えてよいであろう。また、本研究では団塊の世代の特徴を捉えることが目的の一つであった。世代を区分し、ダミー変数として投入した重回帰分析の結果、年

齢が高くなるほど地域貢献型の活動へのニーズが増すことは読み取れる。すなわち、団塊の世代は、それ以前の世代と比較して、知識提供型の活動へのニーズが高いことが示唆される。これが団塊の世代の特徴であるかどうかの明確な結論は出せないが、戦後の日本を創出してきたリーダーとしての意識の強さが、その経験を伝えるような活動へのニーズとつながるのかもしれない。また、地域と関わりの希薄さ（中村・安田，2004）という特徴が地域貢献型の活動へのニーズを妨げている可能性も考えられる。この傾向が、団塊の世代の効果なのか、年齢の効果なのかは今後の検討課題ではあるが、今後の高齢者に対してはこれまでよりも知識提供型のボランティア活動の提供が必要となることは示唆される。

３．今後の課題と展望

本研究と先行調査および先行研究において一致した点（具体的には、社会福祉に関するボランティア活動はニーズが高いこと、最終学歴が高いほど知識提供型のボランティア活動へのニーズが高いことなど）はほぼ確実なことであろう。しかし、先行調査および先行研究と一致しない点に関しては、本研究の結果のみからどれが正しいと結論付けることはできない。属性に関する様々な要因を統制した実証的研究の積み重ねは今後も必要になる。また、ボランティア活動へのニーズは、制度や社会状況とも関わる可能性は大いにあるため、常に実態調査を行い、ニーズの変化を考慮しておかねばならないであろう。

謝辞

本研究における調査は平成16年度ヒューマンサイエンス基金（代表；藤田綾子）の助成により実施したものである。

引用文献

天野正子　2001　団塊世代の「もう一つの」読み方　天野正子（編）　団塊世代・新論＜関係的自立＞をひらく　有信堂　Pp.3-37.

Bowen, D. J., Andersen, M. R., & Urban, N. 2000 Volunteerism in a community-based sample of women aged 50 to 80 years. *Journal of Applied Social Psychology,* **30**, 1829-1842.

Grass, T. A., Seeman, T. E., Herzog, A. R., Kahn, R., & Berkman, L. F. 1995 Change in productive activity in late adulthood: MacArthur studies of successful aging. *Journal of Gerontology,* **50**, 65-76.

小林江里香・深谷太郎　2005　都市部の中高年者におけるボランティア活動のニーズの分析　老年社会科学，**27**(3), 314-326.

Lum, T. Y., & Lightfoot, E. 2005 The effects of volunteering on the physical and mental health of older people. *Rseach on Aging,* **27**, 31-55.

Menec, V. H. 2003 The relation between everyday activities and successful aging: 6-year longitudinal study. *Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCES,* **58B**, S74-S82.

Moen, P., Dempster-McClain, D., & Williams, R. 1992 Successful aging: A life-cource perspective on women s multiple roles and health. *American Journal of Sociology,* **97**, 1612-1638.

Morrow-Howell, N., Hinterlong, J., Rozario, P. A., & Tang, F. 2003 Effect of volunteering on the well-being of older adults. *Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCES,* **58B**, S137-S145.

Musick, M. A. & Wilson, J. 2003 Volunteering and depression: the role of psychological and social resources in different age groups. *Social Science and Medicine,* **56**, 259-269.

内閣府 2004 高齢社会白書（2004） http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2004/zenbun/16index.html（2005.5.15.取得）

中原純 2005 高齢者のボランティア活動に関する研究の動向～シニアボランティアの現状と課題～ 生老病死の行動科学，**10**，147-155．

中原純・藤田綾子 2007 向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係 老年社会科学，**29**(1)，30-36．

中村実・安田純子 2004 ベビーブーマー・リタイアメントー少子高齢化社会の政策対応ー 野村総合研究所

NALC シニア研究所 2004 団塊の世代の“シニアデビュー”が社会を変える市場を変える プラン・ドゥ

Okun, M. A. 1994 Relation between motives for organizational volunteering and frequency of volunteering by elders. *Journal of Applied Gerontology,* **13**, 115-126.

大阪府地域福祉推進財団老人総合センター 2001 高齢者の市民社会活動推進に関する調査報告書～情報交流システムの構築に向けて～ 大阪府地域福祉推進財団老人総合センター

Peters-Davis, N. D., Burant, C. J., & Braunschweig, H. M. 2001 Factor associated with volunteer behavior among community dwelling older persons. *Activities, Adaptation and Aging,* **26**(2), 29-44.

堺屋太一 1976 団塊の世代 文藝春秋

Thoits, P. A. & Hewitt, L. N. 2001 Volunteer work and well-being. *Journal of Health and Social Behavior,* **42**, 115-131.

Wilson, J., & Musick, M. A. 1997 Who cares? Toward an integrated theory of volunteer work. *American Sociological Review,* **62**, 694-713.